

日本の作家
25

谷協理史著

浮世の認識者
井原西鶴

新 典 社

日本の作家 25

谷脇理史

浮世の認識者
井原西鶴

新
典
社
刊



谷脇 理史 (たにわき まさちか)

昭和14年11月24日 群馬県生まれ。

昭和37年3月 早稲田大学第一部文学部卒業。

昭和43年3月 同大学院博士課程修了。

現 職 筑波大学文芸・言語学系教授。

文学博士。

専 攻 日本近世文学。

主 著 日本古典文学全集『仮名草子集・浮世草子集』(共著, 昭46, 小学館), 同『井原西鶴集(3)』(共著, 昭47, 小学館), 『西鶴研究序説』(昭56, 新典社), 『西鶴研究論攷』(昭56, 新典社), 『元禄文化 西鶴の世界』(昭57, 教育社), 完訳日本の古典『日本永代蔵』(昭58, 小学館)

現住所 〒305 茨城県新治郡桜村並木
2-204-102

浮世の認識者 井原 西鶴

日本の作家 25

昭和62年1月10日 初版発行

定価1,500円

著 者 谷 脇 理 史

発行者 松 本 輝 茂

発行所 株式会社 新 典 社

東京都千代田区西神田3-5-6 大坂ビル

TEL 東京(03) 265-3781, 3863

振替口座 東京7-26932 〒101

検印廃止, 不許複製

(株)相馬企画, 牧製本印刷(株)

© Masatika Taniwaki

I S B N 4-7879-7025-9 C0395

日本の作家 25

谷脇理史

浮世の認識者
井原西鶴

新
典
社
刊

編集委員

秋山虔・有吉 保・犬養廉・井上宗雄・岡 保生・片桐洋一・片野達郎・
木俣修・小林茂美・今米蔵・神保五弥・塚原鉄雄・橋本不美男・藤平春男



芳賀一品筆「西鶴肖像」(久保克敬氏蔵，小学館提供)

井原西鶴（いはら さいかく）、俳諧師、浮世草子作者。寛永十九年（一六四二）～元禄六年（一六九三）八月十日。本名は平山藤五。号は、はじめ鶴永、のち西鶴。西鶴などの別号もある。大阪の富裕な町人の子として生まれ、十五歳ごろから俳諧をたしなみ、二十一歳のころには俳諧の点者となっていたと推定される。その俳風は、始め貞門の流れにのるものであったが、談林俳諧の中心であった西山宗因に近付き、一六七〇年代には談林調となつて行く。とりわけ、自派の新風を鼓吹する『生玉万句』（一六七三）以後、その派手な活動ぶりによつて談林俳諧師たちの尖鋭と目され「おらんだ西鶴」と称されたりしている。延宝三年（一七二五）、亡妻の追善のために一日千句の独吟を行つて、『俳諧独吟一日千句』を刊行し、同年中に剃髪するが、その後西鶴の俳諧師としての活動は、矢数俳諧などを中心に、いっそう本格化して行く。しかし、西鶴の本領は、俳諧活動の余技として執筆した『好色一代男』（天和二年刊）の好評にこたえて、四十一歳以後力をそそぐようになる浮世草子の分野で、よりいっそう発揮されていると見るべきであらう。

『好色一代男』は、主人公世之介の一代記という型をとり、その好色遍歴を中心に浮世の姿や人の心のありようを描きあげた作品だが、その清新な発想と文体とは、それ以前の仮名草子とのりこえ、現代風俗小説ともいふべき浮世草子の新たな領域を確立するものであった。西鶴は、ひき続いて、その続編の型をとる『諸艶大鑑』（貞享元年―一六四一刊）、さらには『好色五人女』（貞享三年刊）、『好色一代女』（同）などの好色物浮世草子を發表して、町人たちの享樂の種々

相、女性たちの生や風俗の諸相を卓抜な手法で描破した。

また、『西鶴諸国ばなし』（貞享二年刊）、『懷硯』（貞享四年刊）では諸国の奇談・珍談をとりあげ、『本朝二十不孝』（貞享三年刊）では親不孝の問題に、『男色大鑑』（貞享四年刊）では当時流行していた男色の問題に焦点をあて、浮世の一面を照射している。さらに、武家の敵討ちをとりあげる『武道伝来記』（貞享四年刊）、義理の問題を中心に武家の行為や心情のあり方をとらえる『武家義理物語』（貞享五年刊）を発表して、町人の目から鋭く武家の姿を描きあげている。

そのような旺盛な執筆活動が続ける中で、西鶴は、貞享五年（一六八八）、町人の経済生活に取材した『日本永代蔵』を発表する。いわゆる町人物浮世草子の第一作がこれである。それ以後、西鶴は、多方面に素材を求める方向を捨て去るわけではないが、没後刊行された『西鶴織留』（元禄七年刊）を元禄一―三年ごろ執筆し、その関心は町人の日常生活へと集中して行く。書簡体小説の型をとって恥多い人間の生の一面をえぐり出した『万の文反古』（元禄九年刊）を未完のままで放置した西鶴は、大晦日を時間的背景として、主として中下層町人の生活ぶりを描く『世間胸算用』（元禄五年刊）、町人の享樂生活の行きつく果てを描いた『西鶴置土産』などの秀作を書き、元禄六年（一六九三）八月十日、「浮世の月見過しにけり末二年」の辞世を残して、五十歳で没した。

目次

井原西鶴の輪郭	五
---------	---

第一部 浮世の認識者西鶴

第一章 作家以前の西鶴	一二
-------------	----

一 「好色屋の西鶴」	一二
二 大阪町人西鶴	二一
三 俳諧師西鶴	二七
四 『生玉万句』の西鶴	三二
五 妻の死と西鶴	三九
六 矢数俳諧の西鶴	四九

第二章 天和期の西鶴……………五七

一 『好色一代男』出刊まで……………五七

二 主人公世之介をめぐる……………五九

三 『好色一代男』の世界……………六四

四 天和三、四年の西鶴……………七三

第三章 貞享期の西鶴……………八〇

一 新たな世界へ……………八〇

二 二つのモデル小説……………八三

三 西鶴の方向転換……………八九

四 さまざまな世界への認識……………九三

第四章 元禄期の西鶴……………一〇四

一 多産な元禄元年……………一〇四

二 病中の西鶴……………一〇八

三 最晩年の西鶴	一一四
----------------	-----

第二部 作品への視点

第一章 『好色一代男』と『源氏物語』	一二六
--------------------------	-----

第二章 『好色一代女』試論	一五七
---------------------	-----

— そのしたたかな生と性 —

第三章 『武道伝来記』の時代設定	二〇六
------------------------	-----

第四章 『日本永代蔵』の方法と読者の問題	二四二
----------------------------	-----

略年譜	二六六
-----------	-----

主要参考文献	二七二
--------------	-----

あとがき	二七六
------------	-----

第一部

浮世の認識者西鶴

第一章 作家以前の西鶴

一 「好色屋の西鶴」

七歳の時に腰元の袖を引き、八歳の寺子屋入門時に師匠に恋文の代筆をたのみ、全国の遊廓を遍歴し、ついには「是より女護の嶋にわたりて、^{つゆ}抓どりの女を見せん」と、女護の嶋へと船出して行方知れずになる『好色一代男』の主人公、一生のうちに「たはぶれし女三千七百四十二人、少人のもてあそび七百二十五人」であつたという世之介が、その作者井原西鶴自身であるはずはない。それは当たり前すぎることなのだが、作品の中から作者像をとらえようとする意識は、いつの時代にも働くもののようである。世之介イコール西鶴ではないにしても好色本作家西鶴には、それなりの体験があつたのではないか、さもなければ、あのような作品は書けないだろう——おそらくは、そのような予想から、西鶴は好色、色好みの人物といったイメージが、現在も巷間に流布しているように見うけられる。『二代男』をとりあげた現代のテレビ映画や芝居の多くが、西鶴と世之介とを重ね合わせるようにするのも、おそらくは、そのよう

な予想を前提とするからなのであろう。

そして、そのような見方は、西鶴の存生中、すでに三百年前にも行われていたのである。貞享五年（二六〇正月、西鶴四十七歳（数え年、以下同じ）の時に刊行された西村本の浮世草子『二休咄』巻四の四「法の人」の冒頭部は、

好色屋の西鶴が曰く、今の世に多きもの、供老人つれし医者と道心者、さりてはよくいへり。

と始まるが、ここではそのものずばり、「好色屋の西鶴」という仇名を西鶴に奉っているわけである。もちろん、この「好色屋」とは、西鶴即好色ということではなく、『二代男』以後、『諸艶大鑑』（好色二代男）『好色五人女』『好色一代女』等を続々と書き、好評を博している好色本の作者の意にちがいはないのだが、同時に、そのようなものの作者は、当然好色・色好みといった見方が前提にある仇名でもあることは確かであろう。

さらに、『二休咄』には、何やら西鶴を暗示するかのとき「太鞍もち西覚といふ坊主」が登場し、「西覚は、師かと思へば大きな野暮也」といった西鶴への皮肉とも見られる言葉もある。当時の読者が、この「西覚」を西鶴ととらえて読んだという確証はないが、『二休咄』がその序文で、

今の世の中、咄につき人の心好色に成りけるより、西鶴ももてはやさる。

と「西鶴」の名を出し、「西覚」宅の場面である巻二の三「品さだめ」の挿絵に丸顔の坊主頭の人物（西鶴の肖像として知られるもののイメージに類似）を描き、前出巻四の四で「好色屋の西鶴」を登場させていることなどを考えれば、「西覚」と「西鶴」とを混同させようとする作者のねらいを読みとることもできるのではなからうか。西鶴Ⅱ西覚Ⅱ太鼓持Ⅱ好色Ⅱといった等式が、この『二休咄』の世界では、虚構という前提を置きながらも、すでに西鶴のイメージとして成り立っているごとくなのである。「好色屋の西鶴」といった仇名は、好色本作者なるが故に当然好色、さらには人格低劣、生活滅茶苦茶といった印象をおのずから与えることにもなりそうである。

もつとも、『二休咄』の作者は、そのような「好色屋の西鶴」の「今の世に多きもの、供壺人つれし医者と道心者」（『本朝二十不孝』巻一の四「慰み改て咄の点取」の一節）を引いて、「さりとはよくいへり」と評し、「今の世」の一面に対する西鶴の的確なとらえ方には、一応の敬意を表している。「好色屋」とはいえ、さすがは西鶴といったニュアンスがここにはあるのである。西鶴に対抗しつつ諸作品を刊行し、結局は西鶴を超えられなかった西村本の作者の本音が、はからずも出てしまったといったところであらうか。